

# 反転するユートピア「アトランティス」： 新大陸と近代科学文明の成立

山 崎 好 裕\*

はじめに

海中に没した古代の大陸として知られるアトランティスは、大哲学者プラトンが晩年の対話篇『ティマイオス』と、その未完の続編『クリティアス』において描写している。『ティマイオス』はプラトンの自然哲学を描いたものとして有名であり、創造主が登場することから中世キリスト教世界でもよく読まれていた。本稿では、プラトンがその自然哲学において描こうとした思想とは何であったのかを明らかにし、それがアトランティスの寓話といかなる関連を持っているのかを解明していく。こうした文脈での読みときはこれまでに例がない。

プラトンとアリストテレスの哲学がスコラ神学の姿で人々の思想世界を支配した中世が終わると、まさにその神学世界を厳しく批判することのなかから、近代科学技術の精神を確立していこうとする思想家が現れる。イギリスのフランシス・ベーコンである。このベーコンが1627年に『ニュー・アトランティス』のタイトルで出版した著作こそ、科学の知識とそれに基づく知識

---

\*福岡大学経済学部教授

を利用する社会を描いた小説であった。とは言え、ベーコン本人はこの小説の未完の原稿を残して出版の前年に没しており、同書は死後出版の著作集に収められたものである。

プラトンのアトランティスもジブラルタル海峡の先の大西洋に存在したと想定されている。ベーコンのニュー・アトランティスであるベンサレムは、太平洋に浮かぶ孤島にある国である。二人の時代の間は何があったか。それは新大陸の発見であった。西洋大航海時代の冒険者たちは、かつてアトランティスが沈んだ大西洋の先の土地を求めて船を漕ぎ出した。そして、見出したのが南北アメリカの新大陸であったのである。西洋人はそこで未知の文明であるメソアメリカの都市国家文明、そして、南米のインカ帝国に出会う。西洋人たちはそれらの文明を、人間を生贄に捧げて悪魔を崇拝する反ユートピアとして殊更に悪く描いた。そうすることで、西洋人による征服と掠奪を正当化しようとしたのである。

しかし、西洋人が西洋人自身のために行った掠奪は、結局西洋文明世界に反作用を及ぼし、中世的な世界を近代へと激変させていく。本稿では、この時期を、近代経済を準備した本源的蓄積として描いたマルクスの叙述を通じて確認することになるだろう。資本家と労働者への階級分解は、ヨーロッパ文明内部の自生的な過程として進行したのではない。金を中心とする圧倒的な富が新世界からヨーロッパへと流入したことで、それまでの経済秩序が決定的に破壊されることなしには、市場経済に基づく近代経済が構築されることはなかった。

近代経済は近代科学技術がなければ成り立たない。と言うより、両者は双子のように付かず離れずの関係で形成されたと言ってよい。人間が物質的な力を握ること、すなわち、科学の工学的応用が学問の中心に置かれることなしには、社会を挙げての生産性の追求はないであろう。そのためには、中世キリスト教世界を支配していた宗教的な観念的秩序が完膚なきまでに崩壊す

ることが必要なのである。アイデア的なユートピアが物質的なユートピアへと転換すること、これが必要である。本稿はこの大転換を、プラトンからベーコンに至るアトランティスの壮大な物語のなかに見る試みである。

## 1. 『ティマイオス』とプラトンの自然哲学

プラトンの対話篇が全てそうであるように、『ティマイオス』もまた、ソクラテスが人々と対話するという構成になっている。タイトルとして使われるティマイオスは、アトランティスの神官の子孫であり、彼がアトランティスのことを語り、さらに、プラトンの自然哲学と呼ばれている内容を語るのである。

まずティマイオスはアトランティスを次のように語り出す。

傲慢をもって同時に全ヨーロッパとアジアへと向ってそれが進んで来るのを。それは外側からして、アトラスの大洋（大西洋）から突き進んで来るのだったが。何故なら、その時にあっては彼処の大洋は渡航が可能であったから。何故なら、島を入り口のそれをあなた方の言うにはヘーラクレースの柱とよんでいるものの前にそれは持っていたからです。他方、島は同時にリュビエーとアジアよりも大きかったし、そしてその島からは他の島々へと向った通路がその時に進んでいく者たちにとって生じていたが、他方、それら島々からは真向いのすべての大陸の真実の彼の外洋をめぐってあったのへと向ってそうであった。何故なら、一方、これらの我々の語っている入り口のその内側にある限りのものどもは見えるからだ、何か狭い入り口を持った港だと。他方、彼のものは真実の仕方以外洋であり、そしてそれを取り囲んでいる。大地は真実をもって最も全うに大陸として語られ得ることだろう<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 水崎訳（2017）93-94ページ。

大陸に囲まれた海のなかに狭い港をもつ構造は、続編『クリアティス』でさらに詳細にティマイオスが語っている。

海の諸々の輪を、すなわちそれらは往にし方のメトロポリス(中央都市)の回りにあったのですが、第一に、一方、彼らは架橋をしたのでした。路を外から王宮へと向って作って行つては、他方、宮殿を神ポセイドンとその先祖たちの住居において諸々の最初に直ちに造作し、他方、一が他から受け取つて行つてすでに飾り立てられてあるのを飾り立てて行きつつ出来る限り先の王を常に凌ごうとしたのでした。諸々の仕事の大きさと美とでもって見るにつけて仰天へと住居を彼らが作り上げるまで<sup>2</sup>。

中央のアクロポリスを陸地の輪が取り囲み、それを橋々が繋いでいるという美しい都市がアトランティスにはあった。代々の王は競い合つて建物を高くし、ポセイドンの宮殿を飾り建てていったのである。ここに描かれているのは、バベルの塔のように、人間が物質文明を危うく発展させていく姿ではないだろうか。

アトランティスは政治的にも強国であった。再び『ティマイオス』に戻ると、次のような叙述がある。アトランティスの国家はリュビエー、すなわち、北アフリカをエジプトまで、ヨーロッパについてもイタリアまで支配していたのである。しかし、物質文明が驚くほど発展し、政治的にも強大であったアトランティスは、儚くも一夜にして海中に没してしまうのである。

とは言え、後の時に諸々の異常な地震と洪水とが生じては、一昼夜の過酷なそれが襲つて来て、あなた方の許の軍隊なるものすべては一塊に大地の下に沈み、そしてアトランティスの島が同様にして海の下に沈んで

---

<sup>2</sup> 同上、350ページ。

行っては消されてしまったのだ。それ故に、この今もまた渡る術なくそして訪ね得ぬものに彼処の外洋はなってしまうているのだ、粘土がたいへんにすぐ近くにあるものだからそこは妨げで。その粘土を島が陥没しながら提供したのだった<sup>3</sup>。

どうも古代ギリシャでは、ジブラルタル海峡の外の太平洋は、海が浅くて船が航行できないために行けない場所と考えられていたようである。そして、その土砂を提供したのがアトランティスの沈没であったのだ。このように原典を読めば明らかなように、プラトンがアトランティスを創造した理由が、物質文明の脆さ、儂さを強調するためであったというのは明らかなように思われる。そして、その物質軽視の思想は、永遠不変のアイデアこそが真の実在であると考えたプラトンの哲学に整合しているように思われるのである。

さて、プラトンは不滅の存在であるアイデアから、いかにしてその似姿としてのこの世の物質が生成されてくるかについて、『ティマイオス』に至るまでの対話篇で明らかにしたことがなかった。この晩年の対話篇に至って、その秘密がティマイオスの口を借りて語られていく。

然るに、それらのものどもがそのようにそのあり方をあってあるにおいて、同意をしなくてはなりません。一方、一つのものとしてあるのだ。同一のものどもに即し形を持っているものが、生成することなく滅ぶことなきものでまた自らの中へと別のものを別のところから受け入れることもなく自らが何処かしら別のものの中へと赴くことをせず、他方、不可視的であり別の仕方で感覚されることもないものとして、そのものはさあこれをこそ知的活動が考察することを我が事としているものなので

---

<sup>3</sup> 同上、95ページ。

であり産み出されるものであり、常にしきりに持ち運ばれてあり、また或る場所に生じつつかつ再びそこから滅びゆくものであり、感覚を伴った思惑でもって把握されるものなのです<sup>4</sup>。

ここで言う第1の種族がアイデアであり、知覚を超えた普遍の実在にして、万物を生み出す雛形である。その雛形から生み出され、時間のなかで生成と消滅を繰り返すものが、この世の万物である第2の種族である。ここまではそれまでもプラトンによって口にされていたものと言ってよい。しかし、第3の種族は『ティマイオス』に初めて現れる。

他方、あらためて第三の種族でありつつ常に「場」のそれがあり、それは消滅を受け付けないものであり、他方、「座」を生成を持つ限りのものどものすべてに対して提供するものであるのですが、だがしかし、それ自体は無感覚とともに何らかの推理の偽もののそれでもって触れられるものであり辛うじて信じられるものなのでして、そのものに向ってこそさあそこで我々は眼差しをしながらまた、夢に浸りもしまた主張もするのです。必然的なことなのだ、何処かしらにあることが「あるもの」すべては何らかの場所においてある「場」を占有しながら<sup>5</sup>。

感覚を超えた実在であるアイデアは、どこか場所を占めるということはなく、いわゆるアイデア界のなかに鎮座している。しかし、この世の事物は必ず何かしかの場所と空間を占めるようにしか存在しえない。だからと言って、第3の種族である場は、単なる虚無の空間ではない。雛形としてのアイデアを受け止め、世の中の事物を現実に存在せしめる母体であり素材であるようなもの

---

<sup>4</sup> 同上、149ページ。

<sup>5</sup> 同上、149-150ページ。

として、プラトンは捉えている。

それでは、空間と対をなすものと、現代の我々が捉えている時間は、『ティマイオス』ではどのように語られているのだろうか。

されば実にあるのです、この私の思惑に即すれば、第一にこのことを区別せねばならないと。すなわち、何が常にあるものであり、他方、生成を持たないものであるか、そして何が生じ行くもので一方では常にあり、他方、如何なる時にもあらぬものであるのか。一方のものは、さあそこで知性でもって言論とともに把握されるものであり、常に同一のものどもに即してあるものだが、他方のものはあらためて思惑でもって言論を欠いた感覚とともに思惑をされ、生成消滅をし、他方、ありてある仕方では如何なる時にもあらぬものなのである<sup>6</sup>。

イデアは永遠の存在であり、イデア界には時間が流れない。これに対して、この世の中には時間の流れがある。我々が時間の流れを感じることができるのは、事物が変化したり、生成と消滅を繰り返したりするからである。だが、プラトンによれば、生滅を繰り返すものは真の存在ではなく単なる仮象である。この世の事物が生じるのは、プラトンが場と呼んだものにおいてであった。この意味で、場は時空統一体として存在しているのだと言っていいだろう。しかし、所詮は仮象であって、プラトンによれば、それは偽りに満ちた感覚的世界なのである。決して、この世の現実とは学問的検討の対象とはなりえない。そうした解明の対象になりうるのは不偏の實在であるイデアだけなのである。この考え方が長くヨーロッパ世界を支配していたことは言うまでもない。

---

<sup>6</sup> 同上、100ページ。

## 2. 反ユートピアとしての新大陸文明と本源的蓄積過程

大西洋にかつて存在したアトランティスを探し求めたわけではないが、ヨーロッパ人たちは果てがなさそうに見える大海へと漕ぎ出していった。大航海時代が始まったのである。かつて、大西洋に浮んでいたアトランティスと同じく、こうしてヨーロッパ人たちは新大陸を発見した。そして、そこには、プラトンが描いたように未知の文明が繁栄していたのである。

中央アメリカでは、紀元前1200年ごろまでにオルメカ文明がメキシコ湾岸で成立していた。オルメカ文明に影響を受けながら、その周辺で順次生起した文明群を、南北アメリカの間にあることからメソアメリカ文明と総称している。

ユカタン半島では、古くは紀元前1000年ごろから16世紀までの長い期間、マヤ文明が発達した。マヤ文明は4世紀から9世紀にかけて最盛期を迎え、メソアメリカ文明の他の地域が文字を知らなかったなかで、複雑なマヤ文字を生み出した。

メキシコ南部高原のオアハカ盆地には、紀元前500年ごろから8世紀までの長きに渡り、サポテカ文明が繁栄した。この文明はメソアメリカ文明最古の都市を建設したことで知られる。紀元前100年ごろになるとメキシコ中央高原にテオティワカン文明が発達し、太陽のミラミッド群を建設した。これらの文明は9世紀から10世紀までには衰退し、代わってメキシコ中央高地を中心とするトルテカ文明が成立する。14世紀、北方から移動してきた人々がトルテカ文明を継承して、現在のメキシコシティであるテノチティトランを首都とする王国を建設した。このアステカ文明もブラミッド様の神殿や絵文字を持っていた。

南アメリカでは、紀元前1000年ごろ、アンデス高地北部にチャピン文明が成立して以降、ナスカ文明やティアワナコ文明などが生滅を繰り返した。15



世紀半ばになると、現在のコロンビアからチリに至る広大な地域を領土としてインカ帝国が、ペルーのクスコを首都として繁栄した。インカ帝国は文字を持たなかったが、キープと呼ばれる結縄によって行政や徴税などの記録を残し、政治的な統一を維持していた。

ヨーロッパ人の征服者たちは、これらの文明の破壊と富の掠奪を正当化するために、ことさらに反キリスト教のディストピアとして描いたのであった。しかし、新世界から大量の富がヨーロッパにもたらされたことで、他ならぬヨーロッパ自体が取り返しのつかない変貌を遂げていったのである。

近代経済、すなわち、マルクスの言う資本制経済が成立する過程は、『資本論』第1巻第24章「いわゆる本源的蓄積」に描写されている。

この本源的蓄積が、経済学において演ずる役割は、原罪が、神学において演ずる役割とほぼ同じである。アダムが林檎をかじって、以来、人類の上に罪が落ちた。その起源の説明は、過去の小話として物語られる。久しい以前のある時に、一方には勤勉で伶俐で、とりわけ儉約な選り抜きの人があり、他方には怠け者で、自分のすべてのものを、またそれ以上を浪費するやくざ者があった。神学上の原罪の伝説は、とにかくわれわれに、いかにして人間が額に汗して食うように定められたかを物語るのであるが、経済学上の原罪の物語は、そんなことをする必要のない人々があるのはどうしてかを、われわれに示すものである<sup>7</sup>。

勤勉に働いたものが豊かになり、怠け者が貧しくなる。これは経済学の神話であるとマルクスは言う。現実には、あることによって富が社会の一極に集中され、彼らによって他方に自分の労働しか売らない人々の群れが生み出されたのである。勤勉の神話はこの血生臭い事実をオブラートに包ん

<sup>7</sup> 向坂訳、339-340ページ。

で隠蔽するための装置に過ぎない。

アメリカにおける金銀産地の発見、原住民の掃滅、奴隷化、鉱山内への埋没、東インドの制服と掠奪との開始、アフリカの商業的黒人狩猟場への転化、これらのものによって、資本主義的生産時代の曙光が現われる。これらの牧歌的過程は、本源的蓄積の主要要素である<sup>8</sup>。

つまり、社会の一角への富の集積は、ヨーロッパ社会の内生的な解体過程として自生的に生まれたのではなく、新世界の暴力的侵略と掠奪を不可欠の契機として発生したということである。もちろん、この過程自体は前近代的な盲目の致富への欲望によって駆動されていた。だからこそ目を覆うような野蛮がまかり通ったのである。

土着民の取扱いは、西インドのように輸出貿易のみに予定された栽培植民地において、また、メキシコや東インドのように掠奪殺戮にまかされている富裕で人口稠密な国において、当然もっとも狂暴を極めた。とはいえ、本来の植民地においても、本源的蓄積のキリスト教的性格は否定されなかった<sup>9</sup>。

この後には、北米植民地でのネイティブアメリカンに対する残虐行為が描かれる。こうした残虐が残虐として認識されるようになったのは、近代化によって古い野蛮なヨーロッパが変化したからである。そして、その変化をもたらしたのは新世界における暴虐と富の掠奪であったのだ。マルクスの原罪の比喩は極めて適切なのである。

---

<sup>8</sup> 同上、387ページ。

<sup>9</sup> 同上、400ページ。

### 3 . フランシス・ベーコンの見たニュー・アトランティス

フランシス・ベーコンは、マルクスの言う本来の植民地がイギリスによって開かれようとしていた時代に活躍した。1600年にはエリザベス1世の手によって東インド会社が設立された。ベーコン自身が書いているように、三大発明である印刷術と火薬と羅針盤によってイギリスが世界を支配する時代が始まったのである。

哲学者としてベーコンは、プラトンのアイデアに価値を置く世界観を根本的に破壊しようと試みた。プラトンによって儂い仮象とみなされたこの世の中の事物こそが真の実在であり、その工学的な利用が人類に豊かさをもたらす。世界観の転換のなかに、近代経済の勃興があることは容易に見て取れる。

ジェームズ1世の治世で、ベーコンはかつてのトマス・モアと同様大法官の地位に着く。しかし、わずかに3年後、賄賂を受け取った咎で有罪となり、あらゆる公職から追放されてしまう。60歳のときのことであった。翌1611年から、ベーコンはゴランベリイの領地に隠棲して、理想の科学立国によるユートピア世界を描いた小説『ニュー・アトランティス』の執筆に取り掛かったのであった。

主人公の乗った船はペルーに1年ほど停泊した後、日本と中国を目指して太平洋へと漕ぎ出す。しかし、大海の真ん中で激しい暴風雨に会い、命からがら辿り着いたのが周囲5600マイルの島国ベンサレムであった。ベンサレムもキリスト教国であったため、主人公たちは収容所に入れられたものの、待遇はよいものだった。収容所の所長は、1900年ほど前にいた国王ソラモーナが設立した科学研究所のことを語り出す。研究所は現在も存続しており、旧約聖書のソロモン王に因んだ名で呼ばれている。研究所では、事物の諸原因と未知の機能を研究されている。研究者たちは役割によって9階層に分けられている。まず、「光の商人」は諸外国を旅して、進んだ科学技術を収集する。

「強奪者」は文献を渉猟して実験例を集める。「神秘の人」は実用的なアイデアに関わる実験例を収集する。「開拓者あるいは採掘人」は、自らの発案で今までにない実験を行う。「編纂者」は、これまでに述べた4階層の業績を取りまとめて、公理化していく。「賦与者あるいは恩恵を与える者」は、実験結果のなかから人間の生活に有用なものを取り出す役目を負う。「灯火の人」は研究者たちの会議を取り仕切る。「芽を接ぐ人」は、会議でアイデアの出た実験を即座に試行して結果を報告する。最後に「自然の解釈者」は、さらに高度な立場と知識で、科学の公理化を進めていく。

容易にわかるように、ベーコンがいかに実験を重視しているかがわかるのであり、この構想が後のイギリスの王立研究所として実現されていくことになるわけである。ベーコンは冬の屋外で実験をしていて倒れ、気管支炎の発作で65年の生涯を閉じた。しかし、ベーコンの夢は、1660年のアカデミーの設立を経て、その2年後のチャールズ2世勅立の王立協会として実現したのである。

ベーコンは、プラトンの思弁哲学やアリストテレスの自然学に基づいた、キリスト教のスコラ神学を何の役に物立たないものとして徹底的に批判した。一方で、蔑まれていた職人の技術を、かの三大発明のように人類にとって有益なものとして高く評価した。しかし、職人の技術は、彼ら個人に属する技能として伝達不可能なものであり、普遍的な知識としての再現性を持たない。だから、ベーコンは実験を繰り返して、真実の科学的な知識として職人の工学的な知恵を普遍化し、社会のなかで蓄積していこうとしたのである。これは、プラトンのアイデア界に価値を置く世界観とは真逆の観点であり、プラトンが仮象と見做した現実の事物こそが真の知識をもたらすと考えたのである。ベーコンの小説のタイトルは、プラトンが現世的な儂い繁栄の象徴であるアトランティスを価値的に逆転させる思いが込められているのであろう。

おわりに

プラトンは『ティマイオス』のなかで、真実の存在であるアイデアこそが言語によって語ることでできるものだと述べていた。これに対して、移り行くこの世の事物は、仮象であるがゆえに言語によって語りえないのである。これは言語、つまり、ロゴスがアイデアの側のものであることを意味している。

これに対して、ベーコンは人間にとって有用性を持つ技術こそが重要であると考えた。技術はギリシャ語でテクネーである。ベーコンの実験と科学というのは、言わば、このテクネーに言葉を与えるものであったと言えるのではないだろうか。プラトンによってロゴスの下に置かれたテクネーを、ベーコンはロゴスと同等に引き上げ、両者を一体化しようとする。これは経済的な観点から言っても、公的には蔑まれていた致富を社会の根本的価値に高めた近代経済の成立と相即する事態と言えなくもないのである。

#### 参考文献

- マルクス『資本論』(三) 向坂逸郎訳、岩波文庫、1969年。  
水崎博明『プラトーン著作集第7巻 自然哲学』権歌書房、2017年。